6　野口英世の横浜海港検疫所赴任の時期について

中村　澄夫
神奈川歯科大学生物学教室／野口英世細菌検査室保存会

横浜開港から40年を経た明治32年（1899）2月14日に海港検疫法が公布され，4月13日には海港検疫所官制が公布，内務省直轄の検疫所が横浜，神戸，長崎，ロノ津（長崎県）に設置されて，日本の本格的な海港検疫が始まった．横浜には横浜海港検疫所（横浜市本町）が神奈川県庁内に設けられ，事務一般を執り行う検疫所の本部としての機能をもった．これに対し，検疫・細菌検査・消毒・停留・隔離等の検疫所の実質的な機能については同じ所管に属する長浜検疫所（神奈川県久良岐郡金沢村長浜）が担当するところとなった．4月13日にこの横浜海港検疫所でも所長以下職員の任命が行われたことが官報の記述から推測される．

野口英世が北里柴三郎の勧めで，伝染病研究所の助手（同年4月8日に副手から専任の助手に昇格したばかり）を辞してこの横浜海港検疫所に検疫医官補として赴任したのは同年5月であることが，野口の伝記の原典とされる奥村鶴吉『野口英世』（岩波書店，昭和8年）に記されていて，これが他の数多くの野口伝にも踏襲されている．演者は以前より，この「5月着任説」を裏付ける証拠となる辞令や期日を示す資料を探してきたが，手がかりが得られないままであった．ところが平成18年（2006）に154通にのぼる野口英世の若い時代の未公開の書簡（殆どが野口の恩師小林栄宛のもの）が9年の歳月をかけて解読・編集されて『野口英世書簡集Ⅳ』（野口英世記念会，平成18年5月）として刊行され，その中に横浜海港検疫所関連の手紙が初めて1通見出された．そこには「（中略）……去る6月16日，内務省より海港検疫医官補に転任（五級俸四拾円）せられ，横浜在勤申し付けられ，本日（6月21日）赴任の途につき申し候……（後略）」と記されていた．初めて本人の文章で横浜海港検疫所赴任の時期が5月ではなく6月21日であることが，明らかにされたのである．この点について演者は，日本医史学雑誌に速報で報告した（中村澄夫．野口英世の横浜海港検疫所赴任の時期を特定――“ペスト騒動”の前日だった――．日本医史学雑誌 2006; 52(3): 465–467）．

今回はこの「6月21日」説を裏付ける2つの資料について調査・検討したので報告する．

1）日本医事週報　231号（明治32年6月24日発行）の「動静欄」：

「○野口氏　伝染病研究所助手野口英世氏は海港検疫医官補に転任，横浜在勤命せらる」

※ 日本医事週報は，週刊の医学新聞であるので，もしも「5月着任」であるならば，もっと早い時期に掲載されるはずである．

※ 同様な例として，翌年の野口渡米時（明治33年12月5日）の記事も，日本医事週報306号（明治33年12月8日発行）に数日以内に掲載されている．

2）明治32（1899）年5月30日付，フレキスナー教授宛野口英世の手紙（北里教授気付／伝染病研究所助手野口英世→フィリピンのマニラ滞在中のフレキスナー教授宛）：

明治32年4月中旬，ジョーンズホプキンス大学教授のフレキスナー（細菌学者）一行（3名）は，当時マニラに赤痢の大流行があり，アメリカ陸軍からその調査のため派遣されたが，マニラに行く途中，赤痢菌の発見者である志賀潔に会うために来日した．野口英世は北里所長から通訳と案内役を命じられる．その折に野口はフレキスナーに自分のアメリカ留学の希望を申し入れた．数日してフレキスナーらはフィリッピンに向けて出発したが，野口は5月30日付で伝染病研究所からマニラ滞在中のフレキスナーに宛て，再度留学の願いを述べた手紙（北里柴三郎のフレキスナー宛書簡も同封）を出している．この手紙の存在から，野口は少なくとも5月末までは東京の伝染病研究所にいた事が伺える．

以上2点の資料は，野口英世の横浜海港検疫所赴任の時期：「6月21日」説を強く支持している．